

アルテアの魔女 3

第三部
アルテアの魔女と
未来の彼方の子供達

たつみ暁

『アルテアの魔女と未来の彼方の子供達』 目次

登場人物紹介	6
序章	9
第1章	11
第2章	27
第3章	42
第4章	73
第5章	112
第6章	124
第7章	141
第8章	164
終章	199
次巻予告	207
あとがき	208

『アルテアの魔女』 第三部

アルテアの魔女と
未来の彼方の子供達

『アルテアの魔女と未来の彼方の子供達』 主な登場人物

エレ 十八歳

主人公。フェルム大陸二大国家の片割れ、セアク皇国の王姉エン・レイ。

言葉で様々な現象を起こす『アルテア』の使い手。

アルセイルで死の淵に落ちかけ、インシオンから『神の血』を与えられて、彼と同じ能力と破獣化^{カイダ}の呪いを受ける。

インシオン 二十九歳

フェルム大陸のもう一つの大国イシャナの英雄。『黒の死神』の異名を持つ凄腕の戦士であり、遊撃隊^{タドミール}の隊長。

かつて破神を斃したが、その血を浴びた事で、あらゆる傷がたちどころに治癒する『神の血』の能力と、破獣に変貌する呪いを受けている。

エレへの気持ちを自覚するが、彼女の保護者を自認していて、いまだ彼女の想いには応えていない。

シヤンメル 十七歳

インシオンが率いる遊撃隊の一員。重い生い立ちとは裏腹に飄々とした性格。凡人を超えた脚力を誇る『神の足』の能力を有するが、代償に寿命を削る。

リリム 十四歳

インシオン遊撃隊の一員。薬草ハーブの知識に長けている。

破神の血を持つ者の存在を感知する『神の目』を持つが、代償に味覚か嗅覚を失う。

ソキウス 二十五歳

かつてインシオンへの恨みから破神になるが、エレ達に阻止された、『神の耳』と『神の手』の能力者。

エレを救う為に遊撃隊に復帰した。

ヒヨウ・カ 十五歳

セアクの皇王。エレとは血の繋がらない姉弟。

イシャナのプリムラ姫とは婚約者の関係。

プリムラ 十六歳

イシャナの姫君。インシオンとは腹違いの兄妹。

たまに姫にあるまじき暴言が飛び出すが、認めた相手には心優しい。

アーキ

プリムラ姫の懐刀。年齢不詳の優秀な女性密偵。

カナタ 十六歳

エレ達の前に現れた謎の少年。

『アルテア』と『神の血』を有し、エレに執着して、インシオンに並々ならぬ敵意を抱く。

ミライ 十六歳

エレ達の前に現れた、エレの死を願う謎の少女。

カナタとはただならぬ因縁がある様子。

序章 リフレイン

辺り一面見渡す限り、火の海だった。人も建物も地面も、全てが灰燼に帰する。もう元には戻らない。取り戻す事はできない。

破滅のただ中に少女は独り立ち尽くして、何故こうなってしまったのだろうと考える。

どこで階段を昇り間違えたのだろう。正しいと思つてして来た事が過ちであったというのは、今、目の前で繰り広げられている惨劇が証明している。

暗い空を埋め尽くす黒い巨大な獣が吼え、再び炎の雨が降った。このまま死の遣いに身を委ねて生命を終わらせられたら、どんなに楽だろうか。ぼんやりと空を見上げ、隕石のように落ちて来る火の塊を映していた虚ろな赤い瞳は、次の瞬間、はっと正気の光を取り戻した。

赤い石に触れた唇を滑らかに動かし、身に染みついた言葉を紡ぐ。

『決して死に捕まる事の無いように』

無意識にかざした手から虹色の金糸雀カナリヤが生み出され、羽ばたく。金糸雀は青く輝く翼を広げると、空中で無数の羽になって四散し、光の衣となって少女を包み込んだ。彼女を狙って落下して来た炎の塊が不自然に軌道を逸れ、少し離れた建物にぶつかって火花を飛散させる。

死ぬ訳にはいかない。

自分はこの落とし前をつけなくてはならない。

「……カナタ」

ぎゅっと噛みしめて血を流す唇から、呪いの言葉のように憎々しげに、人の名が放たれる。

「許さない。私は必ず、お前を」

炎が風を巻き起こし、風は新たな炎を呼ぶ。赤銀のざんばら髪が乱れて吹き上げられ、進んだ叫び声は、更なる炎上の音の前にかき消された。

第1章 喪失

1

一体何者だろうか。

震えて仕方ない身体を抱き締めながら、砂塵舞うような視界の中、エレは目の前の少年を見上げた。

『あなたを救いに来たんだよ』

彼はそう言った。エレの名も呼んだ。エレが彼を知らなくても、彼はエレを知っている事になる。『アルテアの魔女』の名はフェルム大陸には鳴り響いているだろう。しかし大陸から遠く離れたこのアルセイルに、自分達以外のイシヤナ人がいる事自体が不自然だった。

警戒心を抱くエレとは対照的に、少年は屈託無い笑顔を披露しながら、左手で短剣を取り出した。そして至極当然のように、己の右の掌に刃を滑らせる。

「さあ、飲んで」

滴り落ちる赤い流れが、とてつもなく魅力的に見える。惹きつけられるままにエレは両手を伸ばし、取りすぎるように少年の手をつかむと、唇をつけた。舌に触れる血の味がひどく甘く

感じられる。ごくりと嚙下すると、身体の底からこみ上げていた疼きが治まり、餓えた衝動が
凪いでゆく。視界を遮る紗も取り払われていった。

血に濡れた唇を舌で拭いて、知らず知らずの内に笑みが浮かんでいたが、それに気づいた瞬間、はつと我に返る。自分は今、知らぬ男の血をすすって、満足気に笑っていたのか。こんな姿をインシオンに見られたら、何と思われるだろう。襲い来る後悔と羞恥でたちまち耳まで赤くなり、目尻に涙が浮いた。

「ああ、泣かないで、エレ。あなたに泣かれると、どうしたらいいか困るんだ」

少年が狼狽えるように苦笑し、そつとエレの身体を両腕で包み込んで来た。インシオン以外の男性の腕に抱かれるなど、想像しただけで鳥肌が立つ行為だったはずだ。なのに、少年の腕は温かくて、言い知れぬ安堵感をもたらしてくれる。それが信じられないし、どうしてなのかもわからなくて、錯乱しそうになる。

「——エレ！」

インシオンの声が耳に飛び込んで来たのは、その時だった。振り向けば、赤の瞳が啞然と見開かれ、こちらを凝視している。こんな姿を見られた。彼のその後の反応を予想して、いよいよ頭の中がぐちゃぐちゃになり、エレはぎゅつと目をつむり顔を伏せた。だが。

「あんたが『黒の死神』？」

恐ろしく低い声が耳元で洩れた事に、ぎよっとして目線を上げる。少年は、エレに向けた優しさはどこへやら、明確な敵意を込めた瞳でインシオンを睨みつけていた。

「エレは僕の大事な人なんだ。でも正直、あんたはどうでもいいや」

まるで仇にでも出くわしたような形相で、少年は憎々しげに言葉を継ぐ。

「エレを守れないで死んだあんたなんか、どうでもいい」

意味がわからず、エレもインシオンも絶句してしまふ。インシオンは生きてここにいる。なのに何故、「死んだ」と言うのだろうか。しかももう既に起こったかのごとく、過去形で。

「何をごちゃごちゃ抜かしてやがる」

ますます混乱が深まるが、エレよりもインシオンが先に精神的に立ち直った。

「エレから離れる！」

床を蹴って一気に少年との距離を詰める。少年は唇を綺麗な三日月形に象ると、ぱつとエレから手を離し、身軽に後方へ跳躍した。インシオンの拳が空を切る。確実に捉えたと思った攻撃をかわされ、驚きながらたたを踏む彼目がけて、少年が素早い蹴りを繰り返した。振り向いた顔にもろに一撃を食らってよろめくインシオンの鳩尾に、少年は更に容赦無く拳を叩き込む。

「がっ……は！」

インシオンがたまらずに苦悶の声をあげて、その場にうずくまった。

「なあんだ、弱いじゃない。本当に英雄だったの？」

少年が心底がっかりした、という表情を浮かべて、続けざまに踏みつけようと足を上げる。

エレは慌てて駆け寄り、二人の間に割って入った。

「やめてください！」

両手を広げて制止すると、少年は、理解しかねるように眉をひそめて足を下ろした。

「何？ そんなに弱つちいのに、そいつがいいの？ あなたの趣味、わからないな」

本当にわからないとばかりに、彼は首を傾げる。鯉口を切る音がしたかと思うと、彼は腰に帯びた剣を抜いていた。引き抜かれた刃を見て、エレはまたも驚く羽目になる。少年が手にしたのは透明な刀身。鋼水晶の破タドミール神殺しの剣であった。

「いつそこで殺したら、どうなるんだろ」

相変わらずエレ達には理解不能な台詞を吐いて、宵闇を受けて漆黒に沈み込んだ透明な切っ先が、インシオンに向けられる。発せられる殺意は本物だ。エレがここから動いたら、この少年は一分の躊躇いも無くこの場でインシオンの首を落とすだろう。エレは全身にびっしり汗をかくのを感じながら、少年を凝視した。

しかしそこに、新たな音が訪れた。空を裂く刃の音。それを聞いた瞬間、少年が舌打ちして

一歩身を引いた。エレの目の前に飛び込んで来た小柄な影が、剣を振り下ろし、少年を退かせたのだ。

「やっぱり来たんだね」

少年が鬱陶しげに翠眼を細めて、第三勢力の名を呼んだ。

「ミライ」

応えるように、剣を振り下ろした体勢のままだった小柄な影が、おもむろに身を起こす。肩口で揃えられた赤銀の髪と、少年のものと対のような造りをした鋼水晶の剣が、エレの視界に焼き付いた。

「カナタ」

発せられた声は、まだ少女のものだった。普通にしていたら愛らしいだろう声色を、意識して極限まで低めて、相手を威嚇しようとしている。アルテアを使うエレだからこそ聴き取れる変化であった。

「これ以上お前の勝手にはさせない」

「何でかなあ」

正眼に剣を構える、ミライと呼ばれた少女に対し、カナタと呼ばれた少年は、不可解そうにこうべを振って肩をすくめる。

「何で僕の邪魔をするの？ ミライの為でもあるんだよ？」

「お前に私の人生を任せるつもりは無い！」

あくまで飄々としたふうのカナタに対し、ミライの声音には余裕が無い。触れる者全てを容赦無く切り裂いてやるとばかりの、本当に切羽詰まった人間の発する声であった。

少年と少女は睨み合い、張り詰めた空気が流れる。

「あーあ。もういいや」

先に視線を逸らしたのはカナタの方だった。興が殺がれたとばかりに唇を尖らせると、悠然と剣を鞘に収める。

「皆の顔も見られたし、今日はこれで帰るよ」

「待て！」

ミライの制止も聞かず、カナタは踵を返す。歩み去る彼が振った右手を見て、エレは見間違いかとまたたきを繰り返してしまった。短剣で切りつけたはずの彼の掌は既に血が止まるどころか、傷痕すら残していなかった。それだけではない。その手首にはまっているのは、古びて疵もついてしまっているが、エレが今しているものと同じ、緑色の硝子製の腕輪であった。

さしあたってインシオンに害をなそうとする存在が立ち去った事に、エレはほっと息をつく。しかし、振り返った少女が向けた視線に、脱力しかけた身体が再度硬直してしまった。

ミライと呼ばれた少女が、血のような赤い瞳でエレを見つめていた。そこに親愛の情は欠片も無い。敵意を込めた昏い炎が燃えている。

「……あなたがエン・レイですね」

透明な刃が、今度はエレに向けられる。

「死んでください。世界の為に」

一瞬、何を言われたのかわからなくて、ぽかんと口を中途半端に開く情けない顔をさらしてしまった。落ち着きかけた頭がまた困惑の渦に陥る。インシオンを殺すと言う少年が去ったと思つたら、今度はエレに死ねと言う少女が現れた。一体全体、何が起きているのだろうか。啞然とするエレの喉元に、鋭い切っ先が触れた。

しかし、少女の剣がエレの喉を切り裂き血を溢れさせる事は無かった。

「つたく、後から後から何なんだよ」

付き合つてらんねえ、とぼやく声と共に、ぐいと肩を引かれる。今度はインシオンがエレをかばつて少女の前に立ち塞がった。

「死んだだの、世界の為だの、今時のガキは筋道立てて説明する事もできねえのか」

赤い瞳が静かに怒りをたたえて睨みつけると、少女は明らかにひるんでぐつと言葉を呑み込んだ。何かを言いたげに一度、二度躊躇し、

「筋道を立ててお話ししたところで、あなた方が納得してくださるとは思えません」

諦めを孕んだ声色でぼつりと洩らす。話し合う事を最初から完全に放棄している。エレはミライの閉ざされた感情を鋭敏に感じ取った。だからと言って、こちらもある事を断念してしまつては、何の解決にもならない。

「納得するかしないかは、聞いてみなければわからないでしょう？」

エレの言葉に、ミライだけでなくインシオンも驚きの目を向ける。

「……どうして、あなたは……」

たちまちミライが泣きそうな顔になつてうつむき、独言した。それから気を取り直して、再度エレを見せる。

「これだけ申しておきます。私達は、あなた方の想像のつかない所から来ました。そして時の彼方を見る事ができます。そこでは、エレ、あなたのアルテアが世界を滅ぼします」

やはり理解不能だ。自分から近づこうとしたのに、エレの心はミライの言葉を受け止める事を拒否してしまった。いきなり自分が世界の破壊者だと言われて、はいそうですかと納得する人間が、どこにいるだろうか。

「覚えていてください。私はいつか必ずあなたを討ちます。それが世界の為です」

一方的に言い切ると、ミライは背を向け走り出した。咄嗟にインシオンが追おうとしたが、

少女は身軽に跳ねて外の林へと飛び込み、あつという間に闇に溶けた。

差し当たって、目の脅威が去った事に、エレは今度こそ全身の力を抜いて大きく息をついた。両手を床についた時、肘が笑うように震えている事で、極度の緊張状態にあった事を今更ながら思い知る。

「大丈夫か」

いたわるような声が降って来て、温かい腕がすっぽりとエレを包み込んだ。インシオンの腕だと気づくのにしばらく間が必要だったが、わかった途端、とてつもない安堵感が訪れる。それと同時に、カナタに抱き締められて同じように安心してしまった自分に対する嫌悪感に襲われる。

「何が起きてるのかわからねえが、お前を死なせはしない。あのガキどもからは俺が守ってやるから、安心しろ」

こんなに優しい言葉をインシオンがかけてくれるなんて滅多に無いのに、首肯を返せない自分もどかしくて、エレは唇を噛む。不安の種は既に心の中で芽を出し、びっしりと根を張っていた。

「おれが会った男と同一人物だろう」

エレとインシオンから、少年と少女の話聞いたアーヘルは、腕組みして一通り聞き終えた後、おもむろに口を開いた。

「だがそのミライという娘の方は知らん。初耳だ」

「彼らがどこから来たのかは、聞きましたか」

『私達は、あなた方の想像のつかない所から来ました』というミライの言い方が気にかかって、エレは訊ねる。しかし、少年王はすまなそうに目を伏せて首を横に振った。

「得体の知れぬ大陸人だと思つて、最初から話半分しか聞いていなかった。正体を問いつめようとも思わなかった」

すまぬ、と最後に付け足して、アーヘルは頭を下げた。

「別に謝つて欲しい訳じゃねえよ」

インシオンが深々と息をつく。長い前髪が吹き上げられて揺れた。

「そもそも、連中の目当てがエレや俺なら、厄介事を持ち込んだのはこっちだ。これ以上迷惑かける訳にはいかねえ」

彼の言う通り、カナタやミライの目的がエレ達を排する事だったならば、アルセイルは巻き添えを食っただけの被害者になる。早々にこの地を離れ、二人をもアルセイルから引き離すのが得策だろう。

「国王の事もある。俺達は明日にもイシヤナに帰る」

「そうか」

インシオンがレイ王に言及した事に、エレはきよとんと目をしばたいた。アーヘルは納得しているようだが、自分の知らない内にどんな会話があったのだろうか。今訊きたい気もしたが、男二人の間に流れる、入り込みがたい沈鬱な空気を感じ取って、エレは口をつぐむ事にした。

「とにかく」

気を取り直してアーヘルが両手を広げた。

「これからの晩餐には、皆列席してくれ。そなた達の為に料理人が腕を振るった。食わぬと言われたら、我々の立場が無い」

そう言われては厚意を断る訳にいかない。インシオンも同じ答えに至ったのだろう、「世話になる」とうなずいた。

晩餐はエレとインシオンだけでなく、シャンメル、リリム、ソキウスも同席し、アーヘルの

傍らにはシュリアンがいた。今まで陰のある表情で睨んで来たのが嘘のように穏やかな顔をした王妃は、甲斐甲斐しく夫の杯に飲み物を注いでいる。

「アルセイルは夏になれば、南の極みから北上して来る魚で海が七色に光る。かなりの見物だぞ」

アーヘルはよく喋り、大陸の話も聞きたがった。表向きは上機嫌な少年王であったが、その脳裏には、カナタの存在がちらついているのだろう。時折ふつと笑みを消して物思いに耽る間があるのを、エレは見逃さなかった。

それでも晚餐はゆるりとした空気で平和に過ぎた。豪勢な南海の食事にシャンメルは健啖ぶりを発揮し、リリムも生の白身魚を気に入ったのか、そればかり食べている。

エレはある瞬間にふと気づき、主の無い敷物に目をやった。先程までインシオンが座っていたはずだが、いつの間にかいなくなっている。

アーヘルとシュリアンは、シャンメルとリリムに、フェルムについての質問を矢継ぎ早に投げかけている。エレはそつと腰を浮かせて周囲を見渡した。

「エレ」

背後から声をかけられたのはその時だった。灰色の瞳が親しみをたたえて見つめている。やはり静かに席を立ったソキウスが、飲み物の入った杯をこちらに差し出していた。両手で受け

取ると、もうひとつ、酒精の香りがする杯も差し出される。しかしエレは酒の飲める年齢ではない。困り顔を向けると、ソキウスはくすぐったそうに笑んで、外を指差した。

「私もあなたとは話したい事が山とありますが、まずは譲るべきだと思ひまして」
言われて視線を転じれば、夜に溶けそうな黒装束がテラスでぼんやりと立ち尽くしているのが見える。

「彼相手というのがはつきり言つて癪なんですがね、私はあなたを応援しますよ」

私が言つても信用度は低いでしょうが、と自嘲気味に付け足して、ソキウスは再度酒の入った杯をエレの前に掲げる。

「……ありがとうございます」

エレは頬を朱に染めながら杯を受け取り、軽く手を振るソキウスに頭を下げ、テラスへ向かった。

空には半月が輝いていた。夜風になぶられる黒髪が蒼みを帯びて輝き、赤い瞳はどこか遠くを見つめている。

「インシオン」

呼びかけても、反応は無かった。

「インシオン？」

少しだけ音量を上げて再度声をかけると、びくつと肩が震えて、インシオンが狼狽えた様子でこちらを向いた。小首を傾げながらエレは彼の隣に並び、酒の入った杯を差し出す。

「あ、ああ、悪いな」

インシオンはぎこちなく杯を受け取り、一口、二口含んだ後、何を思ったか一気にあおった。今まで見て来た限り、彼が酒を飲む時は、一杯を少しずつ空けてゆく飲み方しかなかった。やはり先程から彼らしくない。カナタに負けた事がそんなに心を折ったのだろうか。不安げな目を向けると、彼は気まずそうに視線を逸らした。

テラスからは、晚餐の喧騒は少し遠く聴こえる。虫が鳴いて恋を呼ぶ中、エレは黙って手すりに手をかけ、相手が口を開いてくれるのを待つ。流れゆく無言の時間が段々決まり悪くなつて来て、持ちっぱなしだった杯の中身を傾ける。少し温くなった甘酸っぱい果実の搾り汁が喉を通って行った時。

「……レイが」

ひどく細い声で、インシオンが口を開いた。

「レイが死んだ」

言葉の意味をはかりかねて、瞬間、ぽかんとしてしまふ。しかし理解すると、心底からの驚愕がエレの胸に湧き上がった。

たしかに、一月前に謁見した時、ひどい顔色をしていた。だがまさか、あれが最後の邂逅になるなどとは思ってもいなかた。壊れかけの身体を抱えているのはよくわかっていたが、なんだかんだで彼は生きるだろうと、どこかで樂觀視していたのだ。

もう、あの柔らかい声を聞く事はできない。もう、エレの大好きな人と瓜二つの笑顔を見る事は無い。もう、二度と言葉を交わせない。やはり前回会った時に、説き伏せてでも回復のアルテアを使っておくべきだった。後悔が津波となって心の堰を突き崩す。

突然両肩をつかまれて、エレは杯を取り落してしまった。こぼれた果汁が床に染みを作り、杯が転がる。

「俺は結局、あいつに何もしてやれなかつた」

インシオンが顔を伏せ、身を震わせている。絞り出すような声が、手にこもる力が、彼の悔恨の根の深さを示している。それでも涙の色を含んでいないのは、彼が死神として生きる内に泣く事を忘れてしまった証拠だ。

エレの目があつという間に潤み、溢れた感情が水分の形を取って流れ落ちる。彼が泣けないのなら、せめて自分が代わりに泣いて王を悼もう。しゃくりあげながら、インシオンの頭を両腕でそっと包み込む。インシオンが、溺れかけた子供のようにエレにすがりついて、食いしばった歯の間から呻きを洩らす。

人々の声は遠い。誰にも気づかれないように、二人は月光の下で喪失の悲しみを分かち合った。

Sample

当サンプルは、3巻の物語序盤です。
この先は、本編でお楽しみください。

七月の樹頼 たつみ 暁

URL:<http://july.main.jp/>

Twitter:tatsumisn